古代アメリカ学会会報

第 30 号 記念号

「死者の大通り複合」内の西のプラザ・コンプレックスの神殿、テオティワカン遺跡　©村上 達也

目次

◆会員からの投稿　1
◆国際フォーラムの報告　11
◆研究会情報　13
◆事務局からのお知らせ　15
◆編集後記　16

2011 年 8 月

＊本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

会員からの投稿

−調査研究レポート−

●メソアメリカ古典期社会の形成過程に関する考古学的研究

市川　彰（名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期
日本学術振興会特別研究員：ＤＣ２）

【はじめに】

「古典期」は、おおよそ紀元後 3〜10 世紀にあたり、マヤ文明をはじめとしてメソアメリカ各地の様々な社会が発展を遂げる時代として一般的には認識されている。荘厳な建造物、文字、暦、石碑、多彩文土器、そのほかの洗練された工芸品などは多くの研究者を魅了し、これまで多くの調査研究がおこなわれてきた。しかし、そうした「古典期」の特徴ともいえる文化要素の多くは先古典期後期にはすでに出現していることがわかっているし、社会階層などは先古典期中期にまでその萌芽がうかがえる、というのが研究者間で一致した近年の見解であろう。

「先古典期・古典期・後古典期」という時期区分が定着して久しいが、この時代区分が提起されて以来、考古学的調査の数は膨大な数にのぼり、時代区分に対する矛盾や齟齬が指摘されている。時代区分とは、研究者が時代の特質をいかに抽出するかという試みでもある。既存の枠組みにとらわれず、自身の調査研究から構築された歴史観にもとづきメソアメリカを考えてみたい。これが研究の動機である。

【研究の目的】

研究の目的は、先古典期から古典期への連続的変化を観察するという基本路線を強調しつつ、メソアメリカにおける古典期社会というものがいつどのように形成されていったのかを考究することである。そのために次のような課題設定と研究方法にもとづいて現在研究をすすめている。

【課題と研究の方法】

課題①：墓制への労働投下量と社会階層化の関係

メソアメリカにおける墓制研究は、Ruz1965 や Welth1988 をのぞき、体系的な研究は少ない。また、墓制から社会階層などを考古学的に論じる場合、墓の属性（構造、副葬品組成など）を経験的に処理している傾向が目立ち、実証的な研究は非常に少ない点が指摘できる。本研究は、社会の成層化の過程や政治史などを明らかにするうえで墓制研究は有用であるという前提に立つ。

具体的には、墓坑構造とその規模、副葬品の質・量、埋葬姿勢、特殊行為（歯牙変形など）に着目し可能な限り数値化を目指して、墓制への労働投下量を算出することによって、メソアメリカにおける社会階層化というテーマに迫っていきたいと考えている。

課題②：地域固有の発展過程

先古典期から古典期にかけてのメソアメリカ各地の動態は、極めて複雑であったことが示唆されている（e.g. 青山 2007：99）。そうした研究動向もあってか、各地域の詳細な研究成果が年々蓄積されている。しかし、私の主たる調査地エルサルバドル共和国とその周辺ではまだ研究も少なく、不明な点が多い。そこで先古典期から古典期にいたる過程で当該地域が他地域の変化にどのように適応していったのか、を明らかにしていきたいと考えている。

私は、これまでエルサルバドル考古学プロジェクト（団長：伊藤伸幸）、青年海外協力隊などを通じて、チャルチュアパ遺跡の考古学的調査に携わってきた。その間さまざまな研究者の協力のおかげもあり、形質人類学、安定同位体などの化学分析、火山学など多方面からのアプローチが可能となった（e.g. Ichikawa y Morita in press）。

【これまでの成果】

課題①：墓制への労働投下量と社会階層化の関係

これまでにメソアメリカ南東部 73 遺跡 772 埋葬例の分析をおこなった。

先古典期後期頃になると労働投下量の突出した墓が出現するなど、差異が顕著となる。しかし、ヒスイ、貝、黄鉄鉱製飾り板といった威信財と思われる副葬品は、様々なレベルの墓に埋葬されているという状況が看取できる。一方、古典期前期は労働投下量の集約が一段とすすみ、先に述べた威信財の出現パターンも墓坑規模や副葬品の多い墓にほぼ限定的となる傾向がみられる。かなり単純化してしまったふしはあるものの、労働投下量と階層の関係は図 1 のようになると考えている。

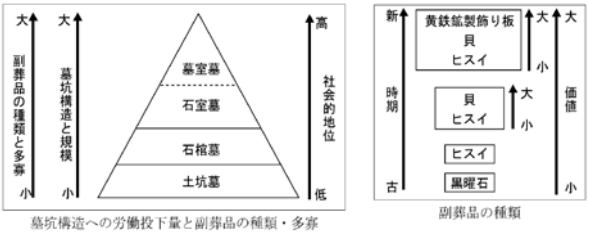

図 1　階層表示の指標

こうした考古学的変化から、先古典期後期頃には大きな労働力を投下することのできる支配層が出現するものの、その権力基盤は比較的脆弱あるいは流動的であったと考えている。一方で、古典期前期には威信財の獲得や政治的関係などを制御することのできる明確な階層上位者が存在する。月並みな結論であるかもしれないが、古典期は先古典期よりも明確な社会秩序が成立する段階の社会と位置づけることができるだろう。

②地域固有の発展過程

近年のチャルチュアパ遺跡の調査成果にしたがえば、イロパンゴ火山噴火がチャルチュアパ社会に劇的な衰退をもたらしたとは考えにくい。また、260±114 年という従来の噴火年代も蓄積されたデータによれば紀元後 350 ー550 年とされ、相対年代を決める上での指標とはなるものの、必ずしも先古典期や古典期といった時代を区分する指標とはなり得ない。とはいえ、イロパンゴ火山噴火前後に、建造物、土器、墓制に大きな変化が看取されるため当該期に社会変化が起きたことは確かなようである。問題はその変化の要因である。現時点では、テオティワカンや他地域の要素が若干ながらみられることから外部勢力の影響が関与していたと推測している。ただし、出土量や型式学的観点から直接的な関係というよりも、間接的（例えば、カミナルフユ経由など）な関係が想定される。現在、拙稿を準備しており、機会を改めて紹介したいと思う。

【今後の課題と展望】

昨年度は、主に課題②を中心に取り組んできた。チャルチュアパ遺跡だけでなく、レンパ川下流域に位置するヌエバ・エスペランサ遺跡の発掘調査もおこなった（市川 2011）。単純な比較は注意しなければならないが、日本の土器製塩研究の嚆矢となった喜兵衛島遺跡と諸特徴が類似している。イロパンゴ白色火山灰に覆われた先古典期後期から古典期前期にかけての製塩遺跡と考えている。調査数の少ない沿岸部地域の調査とあわせて、チャルチュアパ遺跡のような山間部との相互関係も考察し、当該期の実態解明に取り組んでいきたい。

課題①については、本年度からメキシコを中心に現地に長期滞在し、メソアメリカ中の墓制資料の集成および分析をする予定である。また、チャルチュアパ遺跡ラ・クチージャ地区でみつかった埋葬群の分析を通じて、労働投下量や墓制研究の自分なりの理論や方法論を洗練させていきたいと考えている。

【おわりに】

「古典期とはどういう時代ですか？」

日本国内の研究機関で学ぶ自分にとって、日本考古学を専門とする研究者または学生を対象として研究発表や議論をする場合、高い確率で聞かれる質問の一つである。漠然とイメージはあるものの、近年の研究動向なども加味するとなかなか正鵠を射た回答は難しい。では、一体「古典期」という時代の特質はなにか、どのような文化要素あるいは発展段階をもって「古典期」を特徴づけることができるのか。

ゴールは依然として遠い。現時点で何かを提示しえたわけでもなく、極めて無謀な挑戦でもあるかもしれない。ただ、上述した目標を意識する・しないでは雲泥の差が生じることだけは確信している。

【謝辞】

このたびの日本学術振興会育志賞受賞にあたりましては、古代アメリカ学会事務局関係者各位に大変お世話になりました。心よりお礼申し上げます。また、紙面の関係上全ての方のお名前を列挙することはできませんが、調査研究をご支援いただいた方に深く感謝申し上げます。

最後に、授賞式においては他分野の若手研究者との大変刺激的な出会いがあった。今後はそれぞれの分野の垣根を超えた交流やアウトリーチ活動なども模索しており、そうした活動を通じて考古学あるいは新大陸考古学に触れる楽しさ、学ぶ楽しさを伝えていきたいと考えている。

【参考文献】

青山 和夫

2007 『古代メソアメリカ文明　マヤ・テオティワカン・アステカ』講談社選書メチエ。

市川　彰

2011 「エルサルバドル共和国レンパ川下流域から−ヌエバ・エスペランサ遺跡の発掘調査−」『チャスキ』42 号、5−7 頁。

Ichikawa, Akira y Morita, Wataru

in press. Estudio del patrón funerario en el sureste Maya a través de la Arqueología y Antropología Fisica. XXIV Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala.

Ruz, Alberto L.

1968 Costumbres funerarias de los Antiguos Mayas. México: Fondo de Cultura Económico.

Welsh, W.B.M.

1988 An Analysis of Classic Lowland Maya Burials. Oxford: BAR International Series 409.

●デジタルカタログの作成と活用：ペルー共和国アンコン遺跡博物館での実践

ルシア・ワトソン・ヒメネス
市木　尚利（アンコン考古学調査センター）

１．アンコンについて

アンコン区は、ペルー共和国リマ県リマ郡に属する行政区で、リマ市から北へ約 43km の所、東経 77º00´12´´ から 77º12´04”、 南緯 11º34´21´´ から 11º49´30´´の海岸地域に位置している。 年間の降水量は 10mm から 150mm ほどであり、砂漠となっている。相対湿度は 70% 以上となっているが、アンデス西斜面から海岸地域の特有な地理条件から雲が形成されにくく、降雨が皆無に近い。霧が頻繁に発生し、ロマスと呼ばれる砂漠のお花畑が 7 月から 9 月を中心にみられる。アンコンはペルー中央海岸の中でも非常に興味深い古代文化の足跡を遺す場所のひとつとなっている。

２．アンコンでの考古学研究略史

19 世紀後半には多くの学者がアンコンを訪れ、遺跡の調査を実施し始めた。アンコンの墓地遺跡で最初に行われた学術的発掘調査は 1874 年と 1875 年、ウィリアム・レイスとアルフォンゾ・ストゥーベルによるものである。彼らは、ミラマール・デ・ネクロポリスとして今日知られる遺跡で発掘を行い、その成果は、三巻にわたる図版付の報告書として出版されている。

20 世紀にはいると、1904 年には、マックス・ウレが貝塚で発掘調査を行い、土器利用以前の「原始的漁民」について報告している。また、1925 年、ウィリアム・ストロングは、ウレの未発表の観察記録に従い土器と出土状況を分析、編年試案を提示した。1941 年には、ゴードン・ウィリー らは、アンコンで発掘調査を行い、その成果にもとづいて、編年試案を提示している。

1945 年には、新興住宅の建設が原因となって、フリオ・テーヨたちによって緊急調査が大規模に始められた。テーヨ死後も、サンマルコス大学の考古学者たちは、アンコンでの考古学調査を継続している。

1994 年 1 月から同年の 2 月にかけて、フェデリコ・カフマン・ドイグが発掘を実施。1997 年には、ピーター・カウリケがアンコンの埋葬についてまとめた本を出版し、ラファエル・セグラが、1946 年から 1949 年までに発掘された資料に基づいて、アンコンにおける中期ホライズン末の埋葬状況の復元を試みている。近年では、アンコンの墓域から出土した金属器の分析とその出土状況復元を試みる研究報告もみられる。

今日までアンコンでは学術的発掘調査で 3000 基以上もの墓が発掘され、出土した遺物の調査・研究がおこなわれてきた。しかし、その調査成果は、一部が公表されてきたにすぎない。そのため長年アンコン遺跡博物館で保管されてきた遺物の記録をまとめ、今後の研究に不可欠な基礎的データを公表していくことが必要となっている。

３．アンコン遺跡博物館の略史

1967 年に、アレハンドロ・ミロ・ケサダ・ガルランドと技師のオラシオ・アルベルティ・ニコリニが中心になって、重要な考古学の遺物を保管するための遺跡博物館を建設する資金をあつめることを目的に、アンコン遺跡博物館及び文化活動協会（以下、アンコン協会）が創立された。1992 年、リマ美術博物館とアンコン遺跡博物館及び文化活動協会の両者の間で結ばれた協定に従って、アンコン考古学調査センターが、アンコンの考古学遺産について調査・普及活動を常時行えることを目的に設立され、同時に常設展示室がつくられることになった。この協定によって、1993 年には、博物館館長にフスト・カセレスを迎え、調査センターと常設展示室が開設され、アンコンの先スペイン期の文化について紹介できるようになったのである。

４．デジタルカタログとその活用

2008 年に、アンコン協会会長に、協会創設者の一人アレハンドロ・ミロ・ケサダ・ガルランドの子息ガブリエル・ミロ・ケサーダ・シスネロスが就任すると、今年に逝去された老翁の意思を引き継ぎ、アンコン遺跡博物館の改善を図るため、カトリカ大学と協力関係をつくりながら博物館所蔵品の整理・保存・デジタルカタログの作成を開始していく。2009 年 1 月以降、現在まで、遺物のデジタル目録の作成、博物館に保管されている遺物の保存作業を、ポンティフィシア・ペルー・カトリカ大学人文科学部とアンコン協会との間の協力プログラムの一環として、考古学者ルシア・ワトソンの現場指揮によって行われてきている。

2010 年 8 月までに作成が終えているデジタルカタログは、現在博物館のホームページ上で閲覧することができる。また、2010 年 2 月には、新しい展示室を設け、カタログで紹介されている遺物が保管・展示されている。デジタルカタログには、博物館に保管されている土器、石器、織物、金属器、木器、マテ製品、人骨、貝殻製品別にまとめられている（http://www.museodeancon.com/#）。

2010 年 11 月には、カタログを参考にしたオーストラリア研究者が古人骨の試料を採取し、DNA 調査を実施し

ている。また、メキシコからテンプロ・マヨール博物館研究員のエミリアーノ・メルガルが訪れ、アンコンで出土した貝殻製品について、ペルー人考古学者たちと共同観察を行うことができた。これらの調査は、カタログ作成後に実施されたものである。まだまだ、デジタルカタログそのものについて課題をもちつつも、様々な研究者に充実した事前調査を行うことを可能にし、現地で具体的なデータを円滑にえることができる。

また、アンコン出土の遺物は、北米シカゴのフィールド博物館、ドイツのベルリン博物館、ペルー国立考古学・人類学・歴史学博物館などに散らばって保管されているが、デジタル化された基礎データをきっかけにして、お互いの遺物についての情報交換、カタログ化の推進、共同研究の実施などが可能になると思われる。すでに、ペルーの国立博物館で保管されている遺物の記録、およびフィールド･ノートの翻刻を開始しており、ベルリン博物館からも保管されているアンコン出土の遺物についてのデータが寄せられている。

５．おわりに

ペルーの地方博物館の多くは、貴重な遺物を多く保管していながらも、情報発信されていないこと、また博物館そのものへのアクセスも容易とは言いがたいケースもあるため、地方博物館は、その役割を十分に果たしているとはいえない現状がある。しかし、アンコン遺跡博物館においては、作成したカタログによって、ペルー国内はもちろん、諸外国の研究者でも、同様に充実した事前調査を行うことができ、現地での調査を動機付け、円滑にすすめていくことが可能となりはじめている。近い将来、具体的な研究成果を発信していくことも可能である。デジタルカタログとその活用によって、これまで地方博物館に保管されたまま、研究対象となってこなかった遺物のもつ重要性を改めて認識し、国内・国際的共同研究や文化財保護活動を促進していくことができると考えられる。アンコン遺跡博物館の実践は、今後アンデス地域の地方博物館における、ひとつの活動モデルとなっていくと思われる。

図　アンコン遺跡博物館所蔵遺物の諸例

●ホンジュラス、コパン遺跡の調査と問題点

今泉 和也（北海道大学大学院博士課程）

筆者は 2005～2011 年の期間にホンジュラス、コパン遺跡における調査プロジェクトである PROARCO（コパン考古学プロジェクト）に参加して土器分析を行ってきた。本論はこの間に分析した 11426 点の完形・破片資料を基に、コパン遺跡中心部の大広場の北に位置する 9L-22 建造物グループについてその復原を試みた建築過程について、そしてそこから推察されるコパン遺跡における土器研究の問題点について簡易に紹介したい。

コパン遺跡における調査・研究の歴史は古く、1834 年のフアン・ガリンドによる調査報告を最初としている。1881 年以降から大英博物館やハーバード大学を始めとする各調査機関による本格的な調査が行われており、1999 年より中村誠一主導のコパン遺跡保存統合計画（PICPAC）や考古学プロジェクト（PROARCO）が、コパン遺跡での調査や修復保存事業を行っている。この遺跡の中心部にあたる大広場から北に約 150mの位置に「ヌニェス・チンチージャ」と呼ばれている区域が存在する。この区域は中心部の大広場から非常に近いことと、建造物の造りや大きさ、そして内包する埋葬・埋納遺構に伴う奢侈性の強い副葬品や埋納品といった遺物から、エリート階級の住居区域と推測されている（PROARCO 2003）。この区域は大きく 2 つの建造物グループに分かれており、それぞれ 9L-22、9L-23 と W. Fash らによって分類されている（Fash & Long 1983）。本稿では上記

の内 9L-22 建造物グループと、その中で東側に位置している 9L-100 建造物内で検出された Rasgo45 という埋葬遺構を扱う（図 1)。

この Rasgo45 は 9L-100 建造物の内部、旧河川直上のレベルから検出された。遺体の周囲には小・中レキが散在しており、初期検出時にはその上部に規格性に乏しい長方形の平石が複数枚、斜めになった状態であった。共伴する副葬品や埋納品といった遺物は、古代マヤでは重宝された翡翠製品のような奢侈品や精製土器を多数含んでいた。具体的にはインク壺 3 点と人物形象土器 1 点を含む計 27 点の土器と土製縦笛 1 点、いずれの土器のものでもない土製蓋 2 点、計 65 点の装飾品ないし楽器の一部と思われる加工・非加工の貝、そして装飾品と思われる翡翠製品 2 点が出土した。コパン遺跡では、いわゆるエリートの埋葬に伴う土器数が 2、3 点から多くても 5 点という先行研究事例を踏まえても、王墓クラスの重要度の高い埋葬遺構であると思われる。これほどの豪華な副葬品を伴う例は中心グループの外で見つかるケースとしては非常に珍しく、また人骨の分析から被葬者は 12、13 歳程度の少年とされており、このような奢侈品を多数伴う子供の墓の存在は様々な点で非常に興味深い（PROARCO 2004)。

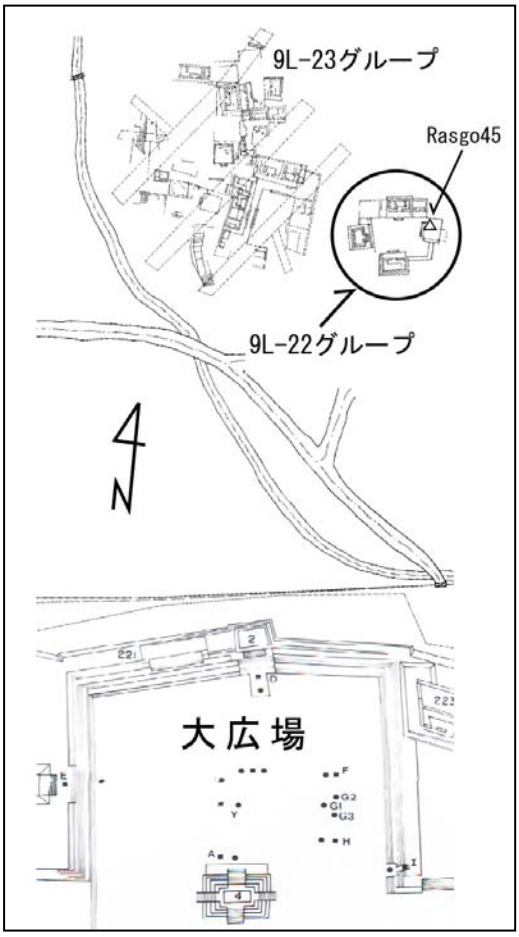

図 1　コパン遺跡中心部と 9L-22、9L-23 グループの位置関係

9L-100 建造物及び Rasgo45 の土器分析では資料の出土位置により、副葬用・追悼儀礼用・覆土中・埋土中の 4 カテゴリーに分類した上で分析を進めた（図 2)。その結果、副葬用土器群は Acbi 期の終末から Cueva 期の初頭（550-650）に属し、また追悼用土器群は Cueva 期（600-700）の時期に相当するであろうことが判明した。しかし一方で、遺体を直接覆っていた覆土や 9L-100 建造物の建設時に用いられた埋土に含まれる土器破片資料は、それらが Coner 期に属するという分析結果となった。報告書によるとこの遺構は完全にシールされた状態で検出されており、二次葬の痕跡は見られなかったとされている。そのため当該遺構が本来は図 2 のような埋葬形態であり、Cueva 期初頭に建造された遺構が何らかの理由で一定期間を経て Coner 期に 9L-100 建造物の建設に伴って埋没したと考えられる。

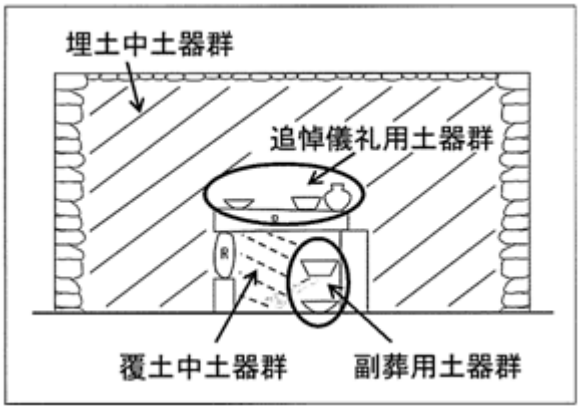

図 2　9L-100 建造物及び Rasgo45 における土器資料の出土位置関係とその名称

一方で 9L-22 建造物グループにおける他の 3 建造物の分析では、各建造物は 2～3 の建築層位を有しており、それぞれ Acbi 期末、Cueva 期、Coner 期に属するという結果になった。そのため痕跡は明らかではないが 9L-100 建造物もこれまでのマヤ研究で説明されてきたように、実際には複数の建築層位を有しており、Rasgo45 の建造とそれを覆う建造物の建築までに空白期間はない蓋然性が高いと考えられる。

このように対象とする資料や調査時記録の質によって解釈の相違が生じたわけであるが、特にこの問題を生じさせている原因は現在のコパン土器研究で用いられている三者によるタイプ分類と編年にあると考えられる。Rene Viel、Bill Casandra、William Fash らによるそれぞれの分類には、細かな部分で多少異なる Type-Variety 法分類が用いられており、分類結果に差異を生じさせている。例えば、タイプ記述上同一と考えられるものがそれぞれ別のタイプ名称を与えられている例や、同名タイ

プが別のグループとしてカテゴリー化されている例が見られ、その結果土器編年にも差異が生じている。特にConer 期は西暦 700-900 年と他時期に比べて長いスパンを有しており、多くの特徴的な標識タイプが Acbi 期や Cueva 期にも出土するとされている。このことが Rasgo45 や 9L-100 建造物を始めとする遺構や土器の時期判定の際に大きな障害となっており、今後 9L-23 建造物グループにおける大量の完形・破片資料の分析を通じてこれまでの編年に再検討を加えていく必要があると考えている。

【参考文献】

Fash, W.L., Long, K.Z.
1983 Mapa Arqueológico del Valle de Copán. Introducción a la Arqueología de Copán, Honduras Tomo III. Tegucigalpa, D.C.: Proyecto Arqueologico Copán, Secretaria de Estado en el Despacho de Cultura y Turismo

PROARCO, Proyecto Arqueológico Copán
2003 Arqueología y Conservación en Copán: Investigación y Restraución en los Grupos 9L-22 y 9L-23 (Complejo Arquitectónico Núñez-Chinchilla). Centro Regional de Investigaciones Arqueológicas (CRIA), Copán Ruinas, Honduras.
2004 Arqueología y Conservación en Copán, Parte II: Investigación y Restauración en los Grupos 9L-22 y 9L-23 (Complejo Arquitectónico Núñez-Chinchilla). Centro Regional de Investigaciones Arqueológicas (CRIA). Copán Ruinas, Honduras.

●グァテマラ・キリグア遺跡における発掘調査

中村　誠一（サイバー大学）

筆者とキリグア遺跡との正式な関わりは、2005 年に国際交流基金の文化協力主催事業としてグァテマラへ派遣されたときから始まる。キリグアは、「キリグアの遺跡公園と遺跡群」という名称で世界文化遺産登録されてはいるが、国内の同じマヤ遺跡を中核とする世界複合遺産「ティカル国立公園」と比べてグァテマラ政府自体にもあまり重視されているとはいえなかった。しかし近年はかなり状況が改善され、2008 年には、キリグアに初めて考古学者を公園担当者（アドミニストレータ）として常駐させる体制に移行し、サイバー大学のフィールドスクールや金沢大学の異文化体験実習にも協力していただいた。

そんな折、公園担当者の考古学者クラスボーン氏から、かねて聞いていた東グループでの発掘調査が開始されたがその継続のための資金捻出に困っている、何とか助けてもらえないか、という相談を受けたのが昨年（2010）のことである。グァテマラでは、ここ数年ずっとティカル国立公園でのプロジェクト形成とその下準備である研究センターの建設計画に関わりきりであったが、それにもかかわらずキリグアの発掘調査へ筆者を強くひき付けたのが、彼らの発掘調査で偶然発見された球技者を彫り込んだ石彫パネルであった。この石彫パネルがかねてより関心を抱いていたマヤ文明史上、一番有名な事件の一つである「西暦 738 年のコパンとキリグアの抗争事件」の鍵を握っているかもしれないと感じたからである。

「738 年事件」は、当時、マヤ地域東南部に覇を唱えていた大国コパンの王を、小国キリグアの王が捕獲し斬首してしまった事件のことである。この事件は、勝者であるキリグアの碑文だけではなく、表現は異なるが敗者であるコパンの碑文にも出現することから、歴史的な事実であると考えられる。そして、大国コパンはこの事件を境に政治体制の転換と覇権の衰退を余儀なくされた一方で、小国キリグアはモタグア川沿いの交易ルートを独占して重要物資や人の流入が顕著となり、その後、大きく発展していったと考えられている。しかしながら、738 年に起こった事件の歴史性が認められても、何を背景としてどうしてその事件が起こったのかに関しては、これまで見つかっている碑文は語ってはいない。このため、その背景に関してはいくつかの仮説が唱えられているが、そのうちの一つに両都市の間に「球技と関係した何らかの抗争があった」という仮説がある。この仮説は、1980 年代後半に故リンダ・シーリ博士らによって唱えられたもので、738 年事件以前にコパンの都市中核で刻まれ残された最後の日付が、それより 113 日前の球技場の最終バージョンに彫られた日付であったことを一つの根拠としている。コパンの新しい球技場の落成記念にコパン王は生け贄を捕まえに行き、逆にキリグア王に捕獲されて斬首されてしまった、と推定したのである。

東グループで発見された石彫パネル（写真参照）は、東グループの 1 B-14 建造物の西側の部屋のベンチ下の石壁に据えつけられていたが、その配置から見て、同じ建造物で左右対称となる東側の部屋のベンチ下にも同様のパネルがあるのではないか、と想定された。

また、東グループ全体の居住シークエンスを補足的な発掘調査により明らかにするとともに、出土した土器を中心とする遺物の分析を行い、グループの建築年代を同定することが必要不可欠な研究課題となっていた。幸い、

過去何度か筆者のコパンでの発掘調査の取材・撮影に来ていただいていた TBS のテレビ番組「世界ふしぎ発見！」（テレビマンユニオン社制作）番組制作チームからキリグア発掘調査費の支援を受け、これらの研究課題に取り組むことが出来た。現場の発掘調査は、グァテマラ人女性考古学者のエリザベス・マロキンが担当し、筆者はこの発掘調査に学術顧問として参加した。

今年（2011）前半に一区切りついた発掘調査においては、残念ながら当初期待していた新たな石彫パネルや碑文の発見はなされなかったが、考古学的に数多くの重要な知見が明らかになった。まず、この東グループの建造物群は、現在の地表面からの観察ではわずか 50 センチほどの高さをもつマウンドにすぎないが、実際は 2 メートル以上の氾濫堆積層に覆われており、かなり大きな支配者層の居住グループであったことが判明した。グループの建造物群は、これまでに少なくとも 3 時期の増改築がなされているが、738 年事件の主役であるキリグア王「カック・ティリウ」の時代に、きれいな切石ブロックを使って建造物を建築し始めたと想定された。残念ながら、1970 年代にペンシルバニア大学博物館によって行われたキリグアプロジェクトの報告書や学術資料は、いまだ土器編年等を含め完全には出版・公表されておらず、発掘土器の詳細な分析と編年の支障となっている。

興味深いのは、それぞれの建造物が王朝崩壊後に改修され再居住されたと思われる点である。特に、それぞれの建造物の古典期後期の最終居住段階と思われるレベルのベンチやテラス部が、川原石の礫層でランパのように覆われている事例や、壁の石をはがされて建物の部屋が改修されている事例などが興味を引いた。キリグアでも、いわゆる「古典期文明の崩壊」前後に、トンプソンの提唱したプトゥンマヤの動きと関係があるのか、メキシコ的なチャクモールの彫像が見つかっている。また、ペンシルバニア大学博物館がキリグアに残していった土器タイプ見本は、1998 年のハリケーン・ミッチや 2010 年の熱帯低気圧アガサによって引き起こされたモタグア川の大氾濫により散乱してしまったが、その中には明らかに古典期終末期～後古典期初め（850～1000 年頃）の指標土器である「プランベート鉛釉土器」が見られる。こういった点から、東グループの建造物群を最後に改修し再居住した人々は、古典期終末期ないしは後古典期初めの人々であったと思われる。

二人の球技者とその場面を解説した碑文を刻んだ石彫パネルは、図像、碑文解読それぞれの専門家によって研究が行われている。内容同定の決め手となる碑文は浸食が激しく、夜間の斜光照射下での精密な記録と分析はこれからの作業となっているが、暫定的な暦の解読からは、西暦 800～810 年頃のキリグア王「ヒスイ空」が球技をしている場面を描写したものという見解が提唱されている。その一方で、このパネル上部のベンチに刻まれた別の碑文には、「カック・ティリウ」王の名前の一部と思われる文字が出現するとともに、パネルに彫られた球技者の装束には、738 年事件で斬首されたコパン 13 代目王の時代の球技マーカーとの関係を示すものが見られる。現在までのところ、この石彫パネルの描写内容と 738 年事件の関係を直接示す証拠は得られていない。しかしながら、キリグア王「ヒスイ空」の治世には、738 年以降断絶していたキリグアとコパンとの国交が回復されたことを物語る碑文が、アクロポリス内の別の建造物から見つかっていることから、いずれにせよこの石彫パネルの図像と碑文が、キリグアとコパンの間の 738 年事件とそれに関連した未だ明らかになっていない歴史に一筋の光をあてるものであることは疑いがない。

（キリグア遺跡公園提供）

これまで全く見過ごされてきた東グループの発掘成果は、世界遺産に登録されながらグァテマラ国内においてもあまり注目を集めているとはいえないキリグア遺跡が、マヤ文明史の解明において、まだまだ大きな潜在力を有していることを示した。考えてみれば、コパンにおいてもアクロポリス周辺の貴族の行政居住グループでは、重要な発見が相次いでいる。この点からも、キリグア遺跡における東グループでの発掘調査の継続が求められているといえよう。

【参考文献】

中村誠一
2011　「アーキオリポート　マヤ文明は「球技」で下克上！？」『ニュートン』2011 年 3 月号
Fahsen, Federico
2010 “Carta sobre Inscripción de la Banca de la Estructura 1B-14” unpublished manuscript for the Project

Looper, Mathew
2011 “Structure 1B-14 Bench” unpublished manuscript for the Project
Marroquin, E., J. Crasborn, S. Nakamura, y P. Castillo
2011 Informe Final：Excavación Arqueológica Grupo Este. Dirección General del Patrimonio Cultural y Natural del Viceministerio del Patrimonio Cultural y Natural. Ministerio de Cultura y Deportes de Guatemala

–エッセイ–

●アメリカでのアンデス考古学修行

松本 雄一（南山大学非常勤研究員）

2004 年の 9 月に何も判らぬまま始まった、私のアメリカの大学院での生活も昨年 12 月に終了し、なんとか無事に博士号をいただくことができました。近年では、海外留学をしている会員も増加しましたが、メソアメリカ研究者に比べ、アンデス考古学研究のためにアメリカに留学している例は少ないと言ってよいでしょう。そこで本稿では、アンデス考古学を学ぶための私のアメリカ大学院留学が、どういったものだったかについて書くことにします。

2002 年ごろ、私は漠然とアメリカに留学しようと考え始めました。当時私が所属していた東京大学の考古学研究室には、アンデスの考古学を専門とする先生がおらず、海外へ留学して博士号を取ることを強く勧められたためです。また、年齢の比較的近い松本剛さん（南イリノイ大学大学院）や村上達也さん（南フロリダ大学准教授）がアメリカでの留学を成功させていたことが、留学先をアメリカに絞る決め手となりました。しかし、この時点ではどこを受験すべきか全く考えておらず、決められるほどの知識もなかったため、アメリカの考古学事情に詳しい国立民族学博物館の関雄二先生にご相談し、イェール大学のリチャード・バーガー博士とコンタクトを取っていただきました。そのおかげで、2002 年夏に運よくペルーでバーガー博士夫妻とお会いすることができたのですが、私の英語は欠片ほども通じず、スペイン語でかろうじて意思疎通が出来たという有様でした。ただ、私が彼の中心的な関心であるアンデス形成期を専門にしていたこと、アメリカでも大きく評価されていたクントゥル・ワシの調査に参加していたことは彼の関心を引いたようで、英語を何とかしてから是非イェール大学の大学院を受けるようにと薦められ、非常にうれしかったことを覚えています。英語が得意ではなく、全く話すことの出来なかった私は、その後 2003 年の丸々 1 年を大学院入試のための英語の対策に注ぎ込まざるをえませんでした。考古学の本を全て段ボール箱に叩き込んで封印し、実家に引きこもってアルバイトしながら大学受験生のような生活を送ったにもかかわらず、TOEFL、GRE といった試験ではイェール大学の入試の足きり最低点程度を取るのが精一杯でした。しかし、大学院入試に当たっては、大貫良夫先生、加藤泰建先生、関雄二先生、西秋良宏先生という錚々たる方々に推薦状を頂くことができ、おそらくはこれが決め手となって無事に入学を許されました。それまでも家族に大きな負担を強いてしまっていたため、5 年間の授業料免除と生活費の授与という恵まれた待遇に飛び上がって喜んだことを覚えています。

2004 年の 9 月に生まれてはじめて渡米した当初こそ、歴史ある大学キャンパスの美しさに驚き、町の風景を楽しんだりもしましたが、そんな外に向ける余裕があったのは最初の一週間だけで、授業が始まると授業の準備のほかには何もできない日々が続きました。大量の課題は全く読みきれず、授業のディスカッションでは何を言っているのか分からず、まったく発言できないという日々が何週間も続きました。このころは課題が読みきれなかったので、本を読みながら歩いていて木にぶつかるという、漫画のような出来事も何度か経験しています。平均睡眠時間も 4 時間を大きく割るようになり、心身ともに完全に追い詰められていました。こんな状態の私にとって、指導教官であるバーガー博士と同期の友人たちが理解を示して助けてくれたことは非常に心強く、今でも感謝しています。バーガー先生の下には、カナダからの留学生で私と専門を同じくする、ジェイソン・ネスビットが同期として学んでいましたが、先生は週一回、2 時間ほどただ三人でリラックスして話すための時間をいつも取ってくれました。その時間に限ってはスペイン語で話すこともあり、私も議論らしきものに参加することができたため、多少は救われました。その毎週のミーティングが実は、英語が話せず追い詰められている私を助けるためのものであることに気付いたのは、ずっと後のことでした。それ以来ジェイソンは私の親友であり、今に至るまで言葉では表せないほど助けてもらっています。何とか最初の一年を乗り切ると、段々と授業にも慣れ、議論にも参加できるようになって来ました。このころから友人たちと飲みに出かける余裕も生まれ、英語も楽になってきたように記憶しています。

イェール大学の人類学部において考古学部門は比較的小さかったのですが、それゆえ教授と学生の距離が近く、学生同士も仲良しでアットホームな雰囲気がありました。また数は少なくとも教授陣は充実しており、バーガー先生の他にも、西アジア考古学の大家であるフランク・ホ

ール、若手マヤ研究者のなかでも注目を浴びていたマルチェロ・カヌート、アフリカ研究で独自の複雑社会論・都市論を展開するロッド・マッキントッシュなどの教授陣が在籍しており、プログラムの中身は非常に濃かったと言えます。学生の数もそれほど多くはないため、授業によってはほぼマンツーマンになってしまうこともあり、今考えると贅沢な話でした。特に印象に残っているのはバーガー先生のアンデス形成期のゼミで、学生は私とジェイソンのみで、古典から最新の論文まで片端から読み、議論をしていきました。時間内に議論が終わらなければ喫茶店に場所を移して続きが行われました。私は日本人研究者が日本語で発表していたデータを読むことができたため、偶にそういったデータを使って先生に反論を試みたりしていました。今思えば彼と対等に見える形で議論ができているという状態に酔っていたのでしょう。子供っぽい話です。また、バーガー先生とマッキントッシュ先生が共同で教えた複雑社会の理論に関するゼミは、それまである種プロセス考古学の枠組みにとらわれていた私にとってのアンデス研究の理論的意義を覆し、今目指している研究の方向性を決定付けることになったといえます。考古学の他にも積極的に社会人類学の授業を取るよう心がけていましたが、特にエンリケ・マイヤー先生、デイヴィッド・グレイバー先生の授業が印象に残っています。マイヤー先生は私とジェイソンだけのために、アンデスの民族誌を週 1 冊のペースで読んでいくというゼミを開いて下さいましたが、これは考古学以外のアンデス研究のバックグラウンドが薄かった私にとって非常に有益でした。また、ジョン・ムラ、ジョン・ロウ、トム・ザイデマという三人の巨人から直接指導を受けた彼の思い出話は、まさにアメリカにおけるアンデス研究の形成過程の雰囲気を生々しく感じさせてくれるものでした。当時の社会情勢のなかで、彼らの強烈な個性のせめぎあいが学問を一つの分野をどのように作り上げていったのかを教えてくれる、授業から外れた雑談が毎回の楽しみでした。グレイバー先生は、とにかく破天荒な方で、政治的行動と人類学との関わりや価値体系というものに焦点をおいた、独自の人類学理論の構築を熱く語る姿が記憶に残っています。また、メソアメリカ研究の大家であるマイケル・コウ名誉教授があるパーティーで私に話しかけてくださり、故寺田和夫先生との思い出などを語ってくれたことも印象に残っています。

2005 年、2006 年の夏休みは、大学から援助を受けてペルーを広く旅行し、博士論文のための調査地をジェイソンと共に探して回りました。この時期に見て歩いた形成期遺跡の数は 100 を越えます。その中から、ペルー中央高地南部のカンパナユック・ルミ遺跡を候補として選定したものの、翌年にその調査のために応募した研究費には一つを除いて全て落ちてしまいました。このときは、片端から研究費を勝ち取って行く同期を横目で見ながら、非常に惨めな気分で毎日を過ごしたものです。ここでもバーガー先生の推薦で学内の研究費を得、なんとか調査に漕ぎ着けることが出来ました。アメリカの大学院では、取った研究費の額というものがシンプルにその学生の力を示す指標と成ります。このときの研究費の申請であまり良い結果を残せなかったことは、後々までコンプレックスとなって私を苦しめ、結局自分はアメリカの大学院では通用しないのかという思いに何度もとらわれ、最終的にはカウンセラーのお世話になるようなところまで行ってしまいました。

その後 2007 年から 2008 年にかけて行ったカンパナユック・ルミ遺跡の調査（松本・カベロ・パロミーノ 2010）に関しては割愛します。ただ一つ面白かったのは、発掘方法に関してバーガー先生と私の間に意見の食い違いがあったことでした。先生は方形の発掘区をいくつか開けて、その結果に応じて発掘区を拡張するべきであるというアドバイスをくれましたが、私は最初から、複数の建築をつなぐ長いトレンチを遺跡の軸に沿って開けるという、クントゥル・ワシ遺跡の発掘で学んだ方法を採用しました。その後、先生は発掘の終盤に一晩かけてリマから私の調査を訪ねてきてくれたのですが、その時に「日本式の発掘だな、でもお前が正しい」と言われ、何とはなしにうれしい気分になったのを覚えています。

その後、2009 年には調査データの整理、研究費への応募と投稿論文の執筆を重点的に行い、2010 年は博士論文の執筆に専念しました。とにかく朝から晩まで書き続けた日々でした。また 2009 年には念願であった米国国立科学基金（National Science Foundation）の研究費を得ることができ、一つの自信になりました。ただこれも簡単だったわけではなく、バーガー先生とジェイソンのアドバイスを入れつつ 10 回を超える書き直しの末に、ようやく取ることができたものです。また日本からの留学生にありがちなことなのですが、博士論文が終わるまではなかなか他のことができず、業績を作ることに気が回らなくなります。私も見事にそのパターンにはまっており、この時期に、自分に業績があまりないことに今更気付き慌てだしました。ほとんどパニックに陥りながら博士論文と投稿論文の執筆を並行し、結果として英語、スペイン語、日本語あわせて 7 本ほど投稿することができました。博士論文は章を書き上げるたびに、指導教官であるバーガー先生に読んでもらってミーティングを繰り返すのですが、1 回で OK が出ることは絶対になく、3 回、4 回の書き直しが普通でした。ダメだしの度にジェイソン

にも読んでもらい、二人のアドバイスを取り入れて書き直すという日々が続きました。気がつけば、真っ赤に添削された草稿の山は段ボール箱二つ分になり、短めにしようと思っていた博士論文も 600 ページを超えていました。この二人が私の博士論文を助けるために費やしてくれた時間がどれほどのものであったかを考えると、今でもありがたさと申し訳なさが半々になったような複雑な気持ちになります。直前には、友人が何人か徹夜で印刷や書類の準備を手伝ってくれるなど、最後まで周りの助けを借りながら、何とか 2010 年 10 月に博士論文を提出し、12 月に博士号を取得することができました。アメリカに来た日から 6 年と 3 ヶ月目でした。

博士号取得のためのアメリカ留学には当然リスクもあります。私は、指導教官と周りの友人たちに非常に恵まれていましたが、彼らの助けがなければ最初の年で挫折していたでしょう。特に言葉を話せないストレスは私が思っていたより遥かに厳しいものでした。また、留学生は日本で学んだことが全く通用しないような感覚にとらわれることが多いそうですが、私もその一人でした。大学院の競争の中では一度日本でそれまでに学んだことを完全に解体して、アメリカのやり方にあわせて構築しなおすという作業が、学問に関わるあらゆるレベルで必要になります。この作業はそれまで自分が積み上げてきたことを否定するようなものですから、精神的に非常に辛いものです。私の場合、日本で学んだことが自分の武器にもなっていることに何年か後で気付くことができましたが、授業や試験で追い込まれている間はそのように考えることは不可能でした。また、大学院生をめぐる状況は大学ごとに大きく異なります。たとえばお金の面でも、私立大学であるイェール大学では博士課程の学生全員に、授業料の免除と生活費の支給がある程度まで保障されていましたが、レベルの高い州立大学などでは生活費から研究費まであらゆる点が厳しい競争であり、学生の振るい落としが激しいとも聞きます。ただこうした点を考えても、アメリカの大学院にいるメリットというのは大きなもので、充実した図書館をはじめとする情報リソース、学会でできる幅に広い人的ネットワーク、また短期間で効率よく大量の知識を得るために組織された大学院の教育プログラムなどは、日本ではなかなか得られないものであることもまた確かです。私の場合は、指導教官や友人と密度の濃い人間関係を構築することが出来たことと、アメリカの若手研究者のネットワークに入れたことが一番の財産だと思っていますが、これは単に私が非常に運が良かっただけかも知れません。

最後にアメリカのアンデス考古学における日本の研究の印象に関して、少し書いてみたいと思います。日本人研究者の研究は基本的に高く評価されており、特にコトシュ、ワカロマに関する出版物（Izumi and Terada eds. 1972; Terada and Onuki eds. 1982, 1985）などは、理想的なモノグラフの見本とされています。ただ一方で、理論的研究があまりされていない、出版の数が少ないという印象を持たれている点も否めません。この点はどちらが優れているかというよりは、日本とアメリカの研究スタイルの差に起因するところが大きいと考えられます。乱暴に単純化しますと、アメリカのアンデス研究では、比較的短期間の間に成果を挙げて数多く出版することが求められますが、日本では大遺跡を長期間にわたって緻密に調査するという方針が貫かれています。その結果日本の研究は、短いスパンでの出版というよりは、時間はかかってもデータの充実した提示を重視する立場であり、そのデータの精細さゆえに安易な理論構築に慎重にならざるを得ないのかもしれません。ただ、日本のアンデス研究の最前線を知っていた私は、アメリカの学会で聞く日本の研究に関する知識とイメージに、忸怩たる感情を抱くことがあったのも事実です。

ここまで振り返ってみて、アメリカにいる間は日本にいるとき以上に多くの方にお世話になったと痛感しています。日本の先生方、先輩、同僚には国内にいるとき以上に励ましてもらいましたし、家族のサポートなしにアメリカでの生活を乗り切ることは不可能でした。指導教官のリチャード・バーガー教授、同期のジェイソン・ネスビットをはじめとする、イェール大学大学院の先生方と仲間たちには言葉で表せない感謝の念を感じています。今後は、アメリカと日本の双方で学んだ経験を生かし、双方の長所を組み合わせながら、英、西、日の 3 ヶ国語で積極的に発表を行い、少しでも学恩を返してゆければと考えています。

【参考文献】

松本雄一、ユリ・カベロ・パロミーノ
2010 「カンパナユック・ルミ遺跡発掘調査手記」『チャスキ』第 41 号 pp. 8-11。アンデス文明研究会/アム･プロモーション。

Izumi, Seiichi and Kazuo Terada (eds.)
1972 *Andes 4: Excavations at Kotosh, Peru, 1963 and 1966.* The University of Tokyo Press, Tokyo.

Terada, Kazuo and Yoshio Onuki (eds.)
1982 *Excavations at Huacaloma in the Cajamarca Valley, Peru, 1979*. University of Tokyo Press, Tokyo.
1985 *The Formative Period in the Cajamarca Basin, Peru: Excavations at Huacaloma and Layzón, 1982*. University of Tokyo Press, Tokyo.

■国際フォーラム「古代アンデス・メソアメリカの暮らしと聖なる動物たち」

愛知県陶磁資料館で「アンデス・メソアメリカ文明展—古代の暮らしと聖なる動物たち—」が愛知県立大学と共催事業として 2011 年 5 月 28 日から 7 月 31 日まで開かれた。国立民族学博物館、BIZEN 中南米美術館、天理大学附属天理参考館、光記念館、タカヨシ・メキシコ美術館などが協力し、杉山三郎（愛知県立大学特任教授）、嘉幡　茂（愛知県立大学客員共同研究員）、小林貴徳（同志社大学非常勤講師）、佐藤吉文（国立民族学博物館外来研究員）が監修した。

その関連イベントとして 6 月 24～26 日に学術フォーラム「神獣と古代権力」が愛知県立大学主催、愛知県陶磁資料館・中日新聞社が共催、古代アメリカ学会・ラテンアメリカ学会が後援して行われた。6 月 24 日～25 日は学術ワークショップ「宗教の具現化と社会進化：古代アンデス・メソアメリカ・アジアの神獣と権力の創造力」が実施され、考古学、歴史学、宗教学という異なった視点から、特に自然界を代表する動物の認知と象徴が作られる過程を、政治組織の形成・変革、さらに社会進化と絡めて重層的に扱った。次の発表、そして活発なディスカッションが行われ、現在、各発表者が出版原稿を準備中である。

・杉山三郎「イントロダクション：メソアメリカの聖動物と古代権力の表象」
・松本直子／松木武彦「認知考古学理論と心の先史学」
・谷口智子「宗教学から見た神獣・聖獣のシンボリズムと古代王権」
・曽布川寛「古代中国の宇宙観における神獣」
・関 雄二「翼を持つ女性：パコパンパ遺跡(ペルー)におけるシンボリズムとイデオロギー」
・久保田将之「古代朝鮮の聖獣と檀君神話」
・丸山裕美子「日本古代史における神獣と国家権力」
・嘉幡茂／フリエタ・ロペス「メソアメリカにおける犬の役割と表象」
・パトリシア・プランケット／ガブリエラ・ウルニュエラ「火山・火の神と国家権力」
・吉田裕彦「インドネシア、バリ島の聖獣二種 ― 獅子「バロン」と牛形の棺「ランブー」 ― 」
・小林貴徳「メキシコ先住民部落におけるジャガーの表象と権力」
・木村武史「動物としての人、人としての動物」
・渡部森哉「先スペイン期アンデスにおける動物分類について」
・マコフスキー「帝国のヒエラルキーと動物：ワリ・ティワナクにおける王権のシンボルとアイデンティティ」
・佐藤吉文「先スペイン期ティワナク社会におけるヘビのシンボリズムとイデオロギー」
・森達也「古代中国における権力と神獣」
・平良直「琉球王朝の動植物のシンボリズムと王権」

また、6 月 26 日にはその成果を含んだ一般公開フォーラム「古代アンデス・メソアメリカの暮らしと聖なる動物たち」が愛知県陶磁資料館で行われ、以下の発表があった。両地域における古代の聖なる動物と創造神の図像、そして古代人の景観認識をキーワードに、当時の社会集団がどのように世界を認知していたのかについて、様々な観点から述べられた。それぞれ簡単に報告する。

・クリストフ・マコフスキー
（ペルー、カトリック教皇大学教授）
「先スペイン期ペルー海岸の図像学における神々・動物・人間」

アンデス文明における神々と動物の捉え方の多様性を図像学的視点から論じた。取り上げたのは、ペルー海岸部に栄えた二つの文化、すなわちモチェとナスカである。モチェの建築や土器にみられる図像の特徴は、物語の構造を備えた漫画的ともいえる表現技法である。そこには神々の世界のほか、神々とひととの関係が描かれた。動物の要素を備えたモチェの神々とひとを結びつけたのは、血の犠牲を伴った儀礼であった。そうした場面が土器に描かれている。

一方で、ナスカにおける神々や動物の表現技法は換喩的で隠喩と特徴づけることができる。また、その描き方も物語的ではなく個別的である。そのナスカでは、動物的要素を加えた祖先や動物を模した超自然的存在が描かれた。その図像選択の基準となったのは、主に農耕に関わる季節の変化であった。そして、そうした図像の表現媒体として重要であったのがミイラ包みに使われた織物であった。その意味で織物は、ひとと祖先と農耕に恵み

をもたらす超自然的存在との関係を如実に物語っている。

以上のように、同じペルー海岸部に栄えながら、アンデスの先インカ期のひとびとは、神々と動物とのあいだに多様な関係を切り結んでいたのである。

・渡部森哉（南山大学准教授）

「古代アンデス人の暮らしと聖なる動物たち」

アンデス文明が栄えた地域は自然環境が豊かで、多くの品種の植物（ジャガイモ、トウモロコシ、キャッサバ、キヌアなど）が栽培される一方で、家畜化された動物はリャマ、アルパカ、クイなどであり、少なかった。これは、アンデス文明は自然を飼いならすのではなく、自然と共存して成立してきたと証左であると指摘する。

農耕が始まる以前に神殿文化が栄え、紀元前 1200 年頃に土器が製作されるようになってから、ジャガーなどのネコ科動物、猛禽類、ヘビなどのモチーフが多く登場する。具体的な類例として、ペルー北海岸のクピスニケ文化、中央海岸マンチャイ文化、チャビン、ナスカ、ティワナク文化などの図像表現を提示した。この図像分析を通して、ネコ科動物、猛禽類、ヘビなどに特徴的な各パーツを組み合わせる複合的なモチーフが様式化され、さらに多様化していったことを主張した。ここには、各社会集団の多様な世界観が実体化され、それは、社会を取り巻く自然や世界に応じて、モチーフとなる動物が取捨選択されていった結果であると結論付けた。

・ガブリエラ・ウルニュエラ／パトリシア・プランケット

（メキシコ、プエブラ - ラス・アメリカス大学教授）

「火山・火の神と国家権力」

認知考古学の観点をより重視した。彼女たちは、私たちを取り囲む景観は、世界や私たち自身を理解するための重要な基礎資料であると主張する。なぜなら、景観とはそこに存在するモノではなく、私たちが世界に意味を与え創りだした世界であるからである。そして、古代人たちは景観の形成を介して、社会のアイデンティティやつながりを強固にしていた。

この認知理論から出発し、古代社会、特にメソアメリカ社会において、景観を構成していた火山は、古代社会の世界観を理解する上で考察すべき対象であると述べる。なぜなら、古代メソアメリカの火山は、魂や生命を持った存在であっただけでなく、先祖の権威を象徴する対象物であったからである。また、古代人にとって、火山は「世界の中心軸」、「人類の発祥地」、「守護神の安住の地」、「社会秩序と権威の源泉」、「死者のすみか」として認識されていた。

なぜ、先祖の権威の象徴であり、神聖な空間としての意味が与えられていたのか。それは、この神聖空間は、3 層の世界（天上界、地上界、地下界）を連結し、各 3 層に生きる存在同士がコミュニケーションできる場であると見なされていたからである。そして、儀礼行為を介して、人々は先祖や異世界の生物が与える恩恵に授かる権利を獲得していた。

一方、古代人たちは何も自然の火山のみを神聖空間として、認識していたわけではない。集落や古代都市の中心部に、この火山を模倣したピラミッドを造りだすことで、為政者や王は権力を強化していたと指摘する。都市の中心に位置するピラミッドは、世界の中心であり、その中心に人智を超えた力が宿るのだ。最後に、古代メソアメリカ社会における世界観は、常に聖なる山から出発していると結んだ。

・杉山三郎（愛知県立大学特任教授）

「古代メソアメリカ人の暮らしと聖なる動物たち」

まず古代メソアメリカ社会が誕生した自然環境について説明した。メソアメリカ地域は、変化に富んだ地形や多様な生態系の中で、多くの異なった植物の栽培化を基盤として古代文明をうみ出したが、食糧源として飼育された動物は犬と七面鳥だけで、運搬用に利用される大型動物は存在しなかった。それでも豊富で多様な動物が周辺の自然界に共存し、餌づけされ野に生きる半野生的動物が、栽培植物とともに人口緻密な古代社会を支えていた。

その後、本題として、テオティワカンの「羽毛の生えた蛇神殿」を基に、動物や聖獣そして神々までもが、古代の人々によって階層化されていたことを主張する。人間社会と密接に関わる多様な自然界を支配する、最も重要な動物は、ジャガー、ピューマ、オオカミ、ワシ、ガラガラヘビであり、テオティワカン古代都市でも、頻繁に権力の表象として登場する。さらに最近のモニュメント内部調査でも、集団生贄墓内部からこれらの動物が大量に出土しており、聖なる動物の特別な象徴的意味づけが理解できる。

これらの聖なる動物の中でも、「羽毛の生えた蛇神」は、図像学的にも今までの神と異なった創造神であることを主張した。様々な動物（ガラガラヘビ、鳥、ワニ、ジャガー）の諸要素を組み合わせた像で、その構成された図像は自然界のパワーを統合した新しいイデオロギーの象徴として、テオティワカンで機能したと推測した。そして、この新しいイデオロギーの誕生が、社会階層化や複雑国家の形成に関わっていたと述べた。さらにその図像の現れ方から、カリスマティックな現人神的な王の存在を指摘した。また、最近の調査結果から、「羽毛の生えた

蛇神殿」の地下に洞窟が発見され、そこにテオティワカンの王が眠っていると推測している。このように、階層化される社会において、聖なる動物にも人間社会と同様の現象が認められ、より高位に位置する聖獣を創造することで、王権の強化を図ったと結論付けた。

（文責：杉山 三郎、嘉幡 茂）

研究会情報

●アンデス文明研究会

http://www.h6.dion.ne.jp/~andes/

古代アンデス文明ならびにメソアメリカ文明に興味を持つ一般の人々による研究会。毎月 1 回、考古学者などアンデス・マヤの専門家を招いての定例講座を開いている。受講料は会員 1,000 円、非会員 2,000 円。会場は東京外国語大学本郷サテライト。会報『チャスキ』を定期的に発行している。

2010 年度の定例講座は次の通り。

■4 月 17 日（土）
「神殿を離れて山野へ：アンデス文明の岩絵研究」
講師：鶴見英成（東京大学総合研究博物館特任研究員）

■5 月 15 日（土）
「形成期研究のフロンティア、ペルー極北部」
講師：山本　睦（日本学術振興会特別研究員）

■6 月 19 日（土）
「トウモロコシとジャガイモ」
講師：関 雄二（国立民族学博物館教授）

■7 月 17 日（土）
「アンデスの組紐文化」
講師：多田牧子（京都工芸繊維大学
伝統みらい研究センター特任教授）

■8 月 21 日（土）
「南東地域から見た古典期マヤ文明の崩壊」
講師：中村誠一（マヤ文明世界遺産研究所所長）

■9 月 18 日（土）
「体で感じるペルーの祝祭」
講師：佐々木直美（法政大学国際文化学部准教授）

■10 月 16 日（土）
「アンデスの市場」
講師：藤井龍彦（国立民族学博物館名誉教授）

■11 月 20 日（土）
「アンデス形成期・近年の研究動向」
講師：井口欣也（埼玉大学教授）

■12 月 18 日（土）
「パコパンパ神殿の発掘 2010」
講師：関 雄二（国立民族学博物館教授）

■1 月 22 日（土）
「古代メソアメリカ社会における周辺地域のダイナミズム：トルーカ盆地とテオティワカン」
講師：嘉幡 茂（愛知県立大学客員共同研究員）

■2 月 19 日（土）
「マヤ語で書く —現代グアテマラ・ケクチ語—」
講師：渋下 賢（東京大学大学院博士課程）

（ＨＰをもとに作成）

●メキシコ学勉強会

http://www.geocities.co.jp/MusicHall/2393/conocer_mexico.html

メキシコ好きの人が集まって、おおよそ月 1 回のペースで、メキシコに関して様々なテーマで話し合っている。話し合うテーマは政治・経済・社会・文化等々、各人がそれぞれ興味のあるテーマについて調べて発表し、それに基づいてディスカッションしたり、時には外部からゲストを招いて、話を聴いたりする。会費は各回、会場費実費の 400 円のみ。

2010 年度の発表者は次の通り。

■第 74 回＝(4 月)「メキシコ先住民像の歴史的形成」
井上幸孝(専修大学)

■第 75 回＝(5 月)「ラテンアメリカのヌエバ・カンシオン」
八木啓代(歌手・作家)

■第 76 回＝(6 月)「安藤二葉のチリ報告」
安藤二葉(版画家)

■第 77 回＝(7 月)「メキシコの絶滅の危機に瀕した言語の研究と保護」
松川孝祐（ニューヨーク州立大学オーバニー校）

■第 78 回＝(8 月)「オルメカ文明とは何か」
土方美雄（フリーランスライター）

■第 79 回＝(9 月)「テキサスの巨星逝く！天才チカーノ・アコーディオン奏者、スティーヴ・ジョーダンが奏でたボーダーランドの歌」
宮田信（MUSIC CAMP, Inc 主宰）

■第 80 回＝(10 月)「ニューヨーク・ラテンの魅力～移民が地元民となったとき、サルサは生まれた」
岡本郁生（音楽評論家・プロデューサー）

■第 81 回＝(11 月)「サラリーマンになってからのメキシコ一人旅」
荒　武（メキシコ学勉強会参加者）
■第 82 回＝(12 月)「コロンビア・アンデスに暮らす先住民族」
柴田大輔（フォト・ジャーナリスト）
■第 83 回＝(2011 年 1 月)「ラテンアメリカで起業する」
高橋慎一（フォトグラファー）
■第 84 回＝(2011 年 2 月)「ABC 三国(Argentine, Brazil, Chile)+ペルーの海軍力競争」
後藤孔達（南米海軍研究家）
（ＨＰをもとに作成）

●イベリア・ラテンアメリカ文化研究会（SECILA）
http://secila.seesaa.net/

この研究会は、ラテンアメリカおよびイベリア半島をフィールドとして、主に歴史学・考古学・社会学・人類学を専攻する研究者・大学院生の交流・発表の場を設けることを目的として 2001 年に始まった。ふだんあまり接することのない研究者が意見交換し、活発な議論を展開する研究活動の場を提供することを目指している。発表者の専門分野に携わる研究者が参加して有意義な議論が行われた。

関西と関東で年間 5 回前後の研究会を開催し、通常の例会とは別に特定のテーマを深く議論するパネル・ディスカッションも数年に一度（現在までに 4 回）開催している。参加の事前登録等は不要。世話人は関西地域：禪野美帆（関西学院大学）、小林貴徳（同志社大学）、関東地域：井上幸孝（専修大学）、小原正（昭和女子大学）。

2010 年度の例会は次の通り。

■第 43 回例会（5/15、同志社大学今出川キャンパス）
・青木利夫（広島大学）「20 世紀後半のメキシコにおける「多文化教育」の転換」
・松久玲子（同志社大学）「19 世紀末から 20 世紀初頭のメキシコにおける女子実業教育」
■第 44 回例会（7/10、大阪経済大学）
・桜井三枝子（大阪経済大学）「グアテマラのマヤ文化、もう一つの「抵抗」の形を考える」
・初谷譲次（天理大学）「メキシコ・キンタナロー州マヤ教会における祈りの再領土化について」
■第 45 回例会（7/24、関西学院大学東京丸の内キャンパス）
・真嶋麻子（津田塾大学大学院）「国連開発計画（UNDP）の「現地化」政策の展開―グァテマラでの活動からみた意義と課題」
・久松佳彰（東洋大学）「中南米における不平等観のデータ分析（試論）」
■第 46 回例会（12/12、専修大学神田キャンパス）
・本谷裕子（慶應義塾大学）　「織りと装いの織りなす平和と紐帯―グアテマラ中西部高地・マヤ村落の事例より」
・青山和夫（茨城大学）「環太平洋の環境文明史とマヤ文明の通時的研究」
■第 47 回例会（12/27、大阪経済大学）
・小林貴徳（神戸市外国語大学）「記憶の領土化―メキシコ、ゲレロ山岳部農村における土地空間と境界領域に関する一考察」
・米田恵子（社会人類学高等調査研究所 CIESAS-Golfo、メキシコ）「チチメカ族の女神イツパパロトルについての考察」
（文責：井上幸孝）

●つくばラテンアメリカ・カリブ研究会
http://www.intcul.tohoku.ac.jp/~syoshida/LACS/

web 上で学術情報誌『ラテンアメリカ・カリブ研究』を発刊している。ラテンアメリカ・カリブ地域の調査研究に関する多様な情報を、幅広く共有することを目的とし、1994 年に始められた。情報誌の発行は年 1 回（5 月）で、毎年日本ラテンアメリカ学会定期大会会場にて配布されている。ジャンルおよび所属は問わないので、投稿希望者はホームページを確認のこと。

『ラテンアメリカ・カリブ研究』第 17 号（2010 年）
■論文
「メキシコのドル化議論における銀貨並行流通法案の意義」（松井謙一郎）
■研究ノート
「17 世紀のチリ先住民族マプーチェの蜂起―新史料からみたその歴史的背景についての一考察」
（中満　和大）
「『サンタ』における娼婦表象―小説から映画への移行を通して」（前野　敦史）
（ＨＰをもとに作成）

●東北ラテンアメリカ考古学・人類学研究会

http://tl3a.wordpress.com/about/

この研究会は、ラテンアメリカをフィールドとする考古学および文化人類学的研究に関して、意見や情報を交換し、お互いの研究を深めていくことを目的として 2002 年 4 月より始められた。 現在、1 年に数回、仙台（東北大学）と山形（山形大学）において、交互に研究会を実施している。参加費無料、参加自由。

2010 年度は、諸事情により 1 回のみ行われた。

■第 47 回 7 月 3 日

「マヤ語文法の再領土化」

吉田栄人（東北大学大学院国際文化研究科准教授）

（ＨＰをもとに作成）

事務局からのお知らせ

１．原稿募集（会員向け）

①会誌『古代アメリカ』

会誌『古代アメリカ』に掲載する原稿を募集しています。投稿希望者は、会誌に掲載されている寄稿規定・執筆細目をよくお読みください。論文原稿は随時募集し、査読を終えたものから順次掲載する予定です。

また、2011 年 12 月刊行予定の第 14 号に掲載する「調査研究速報」（従来の「調査速報」）の原稿も募集します。発掘などフィールドワークの成果はもちろんのこと、文献調査やラボラトリーでの分析結果報告などについても、会員諸氏からの投稿をお待ちしております。なお、原稿枚数などの詳細に関しては、会誌第 13 号（「調査速報」カテゴリー）をご覧ください。なお、「調査研究速報」の原稿締切は 9 月末日頃を予定しております。

いずれの場合も、投稿希望者は下記編集委員宛てに事前にご連絡願います。投稿カードを配付しますので、これを提出原稿に添付してください。

お問い合わせ先：

井上　幸孝（運営委員、会誌編集担当）

〒214-8580　川崎市多摩区東三田 2－1－1

専修大学文学部[redacted]

Tel. [redacted]　Fax [redacted]

E-mail [redacted]

②会報「31 号」

会報の内容を充実させるためにも、会員の皆様には、ぜひ積極的にご投稿くださいますようご協力お願いいたします。

◎内容

○エッセイ、論考など

特にジャンルは設定しないが、古代アメリカ学会の会報記事としてふさわしいテーマ。

○古代アメリカ関連の学会・研究会等の情報

会員が所属する学会・研究会・勉強会・公開講座などの情報・発表報告。

○調査・研究の通信

最近行った調査、研究、関心等に関する紹介。会誌『古代アメリカ』には投稿しないような簡易の情報も可。

○新刊紹介

古代アメリカ関連新刊書籍の紹介。

○その他

会員が必要と思われる情報。

◎形式

○原稿字数は、写真・図版を含めて 4000 字（会報 2 ページ分）以内とします。

○原稿は word ファイルで作成してください。その他のファイルについては、会報担当まで事前にご相談ください。

◎投稿先

多々良　穣（運営委員、会報担当）宛

添付ファイルでメールにて送信してください。

E-mail [redacted]

締切　12 月 28 日（水）

２．第 16 回研究大会のアナウンスと発表者募集（会員向け）

古代アメリカ学会第 16 回研究大会・総会は、2011 年 12 月 3 日（土）に、埼玉大学総合研究棟１階シアター教室において実施されることとなりました。

今年度の研究大会は、昨年同様、研究発表、調査速報、ポスターセッションを予定しております。発表時間、内容は、以下の通りです。なお、発表時間には、質疑応答の時間（5 分間）も含まれますので、ご注意ください。

・研究発表：30 分間を予定。
・調査速報：20 分間を予定。
　　2011 年に行った調査の報告。
・ポスターセッション：
　研究大会会場の外で A0(841×1189mm)版のポスター1 枚を用いて行う。

発表希望者は、研究発表、調査速報、ポスターセッションのいずれを希望するかを記し、題名と要旨（400 字程度）を事務局まで e-mail（jssaa@sa.rwx.jp）、または FAX でお送りください。締め切りは、2011 年 9 月 30 日(金)です。なお当日の発表時間は、発表者数により変更になることがございます。ご了承ください。

会員の皆様には、9 月上旬にあらためて往復葉書で総会、研究大会、懇親会のご案内を送付いたします。出欠についてのご返送（総会ご欠席の場合には委任状欄へのご署名をお願いします）をお願いいたします（9 月 30 日必着）。

研究大会、総会の開始時刻および大会のプログラムについては 10 月に決定し、参加される会員の皆様には、会場のご案内等とともに郵送でご連絡いたします。また、学会ホームページにも情報を掲載いたします。

３．会費納入のお願い（会員向け）

2010 年度までの会費が未納となっている方は、同封いたしました振込用紙でお振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。なお、2008 年度以前にさかのぼり、会費が未納となっている会員につきましては、会誌・会報の発送を見合わせております。

４．会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを 1 冊 2000 円で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ研究会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第 3 号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

＜編集後記＞

まず、こうして会報を編集できたことに心から感謝したい。2011 年 3 月 11 日におこった東日本大震災では、編者が生活している仙台市でも未曾有の激震を体験し、命の危険を感じた。電気が復旧してからメールを確認すると、海外在住の方々も含めて、実に 20 を超える学会員からお見舞いや安否確認のメッセージが届いていた。気温は低くても、とても温かい気持ちをたくさんいただいた。

パリでユネスコ世界遺産委員会が開かれ、現地時間 6 月 25 日、「平泉の文化遺産」（岩手県平泉町）が東北地方で初めて世界遺産に登録されることが決まった。機会があれば、中尊寺や毛越寺などを訪れていただきたい。

今号は 30 号という節目となるので、会員のみなさんに投稿を呼び掛けた。依頼原稿も含め、5 本が手元に届いた。ご協力していただいた方にお礼申し上げたい。しかし、寄せられた「会員の活動状況」の数が会員数の 1 割にも満たないのは、非常に残念である。どのような研究がされているか、会員の関心は高いと思われる。研究成果の積極的な発信と、今後のさらなる学会活動の活発化に期待したい。

（多々良 穣）

発　行　古代アメリカ学会
発行日　2011 年 8 月 1 日
編　集　多々良 穣（運営委員・会報担当）

古代アメリカ学会事務局
〒338－8570
埼玉県さいたま市桜区下大久保 255
埼玉大学教養学部 [redacted]
E-mail：jssaa@sa.rwx.jp
郵便振替口座：00180－1－358812
ホームページ URL　http://jssaa.rwx.jp/